

神道の研究に就て

加藤 玄 智

近來神道の研究が非常に盛んになりまして、之に關する著書も次第に多くなつたといふことは世間周知の事實でありますし、又隨て此研究に従事する所の學者の數も近年大に増して來たといふことは、神道研究といふ点からいつて大に祝すべきことであるといふことは申すまでもないのでありますが、殊に大正十年四月からして東京帝國大學は神道の一講座を獨立させたといふことは、將來神道研究の爲に注目すべき事實であつて獨り學界のみならず國家の慶事といはなければならぬのであります。殊に日本の大學としては夙に斯の如き講座があるべくして今日まで無かつたといふことは寧ろ遺憾千萬なことであつて、今日になつて僅に斯ういふ講座の一つ位が出來たといふことは遅かつたといふ感を禁ずることが出來ぬのであります。而も今日此講座の獨立と同時に將來此神道の研究が益々進んで來る前提としては無きに優るのであつて、確に學界の一大慶事といはなければならぬと思ふのであります。然るに此講座が獨立になります以前に於て東京帝國大學で兎に角神道といふ名前を冠して講義を始めましたのは不肖私であります。私の專攻する學問は比較宗教即ち宗教學でありますから、其立場からして日本宗教史の研究

に這入りました結果、佛教渡來以前の日本人の信仰の様子をも研究したいといふ考からして、遂に神道の研究に這入り、比較宗教即ち宗教學の立場からして神道の研究を開始し、其結果を講義として東京帝國大學に於て始めてやりましたのは私が先づパイオニヤーであつたので、即ち私が死馬の骨となり又研究の露拂ひをしたと申しても其点だけは差支ないと思ふて居るのでありますが、更に私はさういふ方面の研究の必要が日に／＼迫つて參るやうな感が致しました結果、同志相寄りまして丁度明治天皇御隠れの日即ち明治四十五年でありましたが、大正元年十一月三日御誕辰の日を卜しまして、明治聖德記念學會といふ日本研究の學會を首唱いたして終に同志と共に其設立を企てたのであります。明治聖德記念學會は神道等の研究は無論のこと、其他總て日本の精神文明を新しい學問の研究方法に依て研究して、日本の精神文明の特色を學術的に明かにし、内に向つては國民道德等を樹立する基礎的研究とし、外に向つては日本人の國民性を始めとして日本人の真相を世界の學界に紹介し、歐米人をして眞に日本を理會して貰ふやうに其研究結果を外國文で／＼／＼發表し、さういふ學問研究上の事業、言換へれば不朽の眞理探究といふ事業を以て明治天皇の如き不朽の聖帝を御記念申し上げようといふ精神から、其日本學會を明治聖德記念學會と命名した所以であります。此學會も幸ひに同志の盡力に依りまして昨年財團法人となりまして、會の經濟上の基礎も今日では餘程確立して參つたので、將來大に我精神文明の研究には努力したい覺悟を以て立つて居る學會であります。斯ういふ學會が明治四十五年即ち大正元年に出來

て聲を大にして神道の研究を呼び、又其會附屬の研究所に於きまして色々の研究材料を取扱つて居つたので、私も其研究所で斯る研究を促進したのでありますが、さういふ關係からして其研究所からも材料を供給して貰つて遂に私の小研究を一小冊子に纏めて「我國體と神道」といふ名前の下に之を世に公に致しました所、端なく此書物は外國人の注意を引いてビーターズといふ宣教師は西洋の「基督教傳道國際評論」(インタナショナル、リビユー、オズ、ミツションズ)といふ雜誌に於て其内容を紹介旁々批評をして呉れましたが、それから更に日本で發行する外事新聞であるジャパンアドバタイザーといふ新聞が大正十年四月の十五日以後計三回に亘つて之を轉載しました爲に、外國人の間にも餘程神道研究の新しい方面の開拓が紹介されたと私は思ふのであります、今此明治聖徳記念學會の設立の如きも矢張り神道の研究に一大寄與貢獻をなしたといふことを私は信するのであります。斯の如くにして神道研究が今日大に我國に勃興したといふことは眞に昭代の慶事であると私は信するのでありますし、更に申添へて置きたいのは東京帝國大學の神道講座の設立といふことが夙に議會の建議案にもなつて現れたといふので、朝野相擧つて此研究の必要を叫ぶといふことになつたのは、日本國民の立場からいつて非常に慶賀すべき事實であると私は確信するのであります。併し神道を純粹の學術上の立場から研究する者の態度に就て爰に申し上げたいと思ふのでありますが、神道を純粹に學術的に研究するといふこと、即ち例へば大學の講座等に於きまして之を研究する場合は如何なる態度を以てすべきかといふことであります。學者の立場

尙ほ精しくいへば純粹の學者の立場として神道を研究するといふことになりますと、矢張り外の研究と同じやうに眞理の爲に眞理を研究するといふことは到底離れることの出来ない態度であると考へるのであります。更に言換へれば極自由に批評的態度で何處までも研究を進めなければならぬと思ふのであります。それといふのは學者の研究は何處までも研究であつて神道の宣傳ではないのであります。神道の宣傳といふこと、神道の研究といふこととは大體上區別をして置かなければならぬと思ふのであります。神道の宣傳は何處までも熱烈なる信仰の現れでなければならぬのでありますが、神道の研究は何處までも冷靜であつて不偏不黨眞理のある所を明かにするといふ態度でなければならぬのであります。神官神職の養成といふことと神道の純學術的研究といふこととは自ら其趣が違ふといふことを先づ認めなければならぬと思ふのであります。勿論神道の學術的研究と神官神職の養成といふこととは聯絡關係のあるといふことは申すまでもないのでありますけれども、神道の純學術的研究は直に神官神職の養成とは活動の範圍を異にして居るといふことも亦認めなければならぬと思ふのであります。併ながら翻つて考へて見ますのに、日本人が神道を研究する場合は如何に學者的態度を以て眞理の爲に眞理を研究するにありととしても、外國人が神道を研究するとは全く同一の態度に出づることは出来ぬのであります。學問に國籍がないといふことは申すまでもないのでありますけれども、神道と何等實際的關係を有つて居らない外國人が神道を研究する場合と、實際切つても切れぬ縁をつ有て居る日本人の神道を研究する場合は、

どうしても其態度が違つて來るといふことは又免れざる結果であると思ふのであります。言換へれば神道の學術的研究は最公平に批評的でないければならぬのでありますけれども、單に破壊の爲に破壊といふことを目的としては日本人には満足出來ぬのであります。どうしても更に構成的態度を以て之を研究するといふことが必要であると思ふのであります。併しそれと同時に結論がちやんと先きに出來て居つて其結論に何とかか何とかこちつけてしまふといふ態度で之を研究してはならぬのであります。其結論は研究の結果であつて、結論が先きに出來て居つてそれに極端にいへば宜い頃加減の理屈を附けるといふやうな研究の仕方は眞の學術的研究ではないのであつて、學術的研究からいへば所謂テンデンスの批評研究は鼻摘みであるといはざるを得ぬのであります。此表裏兩面の關係といひますか、正反二面の關係といふか一方は批評的であつて同時に遂には構成的でもなければならぬと云ふ点が日本の學者の神道を研究する上に於ては見逃すことの出來ない一つの点ではなからうと考へるのであります。

今回東京帝國大學に於ける出來講座の分擔者の顔觸れを見ますといふと、其處に自ら三つの違つた方面が存して居るのであつて、言換へれば東京帝國大學に於ける神道講座なるものは、先づ以て此三面の研究を認めて成立したといふことが出來ると思ふのであります。其一つは神道に關する古今學者の見解を歴史的に考察して、どの學者はさういふ説を神道に就て立てた、此學者は斯ういふ説を立てたといふ風に研究する仕方、言換へれば西洋の哲學史を研究するやうな風に、又西洋の倫理學史を研究する

やうな風に神道に關する我國の諸學者の見解解釋を調べて行くといふ仕方、是は或は神道哲學說の研究といふことも出来るのでありませうが、さふいふ風な方法で神道を研究するも一つの仕方でありますが、此態度が一つと、もう一つは神社を中心として神社神祇に關する純歴史的の研究、是は日本歴史の學問に堪能な人が其方面から神祇及び神社のことを研究する態度であつて、是も神道研究の一つの大切な部門であると思ふのであります。それと相並んで神道を宗教學若くは宗教史的に研究して行く仕方であつて即ち私が從來東大の宗教學科の中にてやつて居つた神道の宗教學及び宗教史的研究であります。言換へれば宗教學及び宗教史の研究の仕方に依つて我神道の起原及び發達の工合を研究して行くといふ態度であります。今回新設の我東京帝國大學の神道講座は此三方面から成立つて居つて、此三方面から先づ神道の研究に手を着けようといふものと見ることが出来ると思は考へるのであります。そこで東京帝國大學に於て神道講座の此成立は下のやうな事實を反證したものと私はいふことが出来ると思ふのであります。即ち神道は宗教學的に研究することが可能であるといふことを指示して居ると思ふのであります。從來神道が宗教であるか宗教でないかといふことも頗る議論のあつた点でありますし、明治聖徳記念學會の研究部は殊に此問題に就て昨年(大正九年)から本年(十年)に掛けて毎月一回づゝ名家の研究結果を例會の講演に於て願つて居つた位でありますから、此問題もなか／＼其解決は困難な点を有して居ることゝ考へるのであります。兎に角今回東京帝國大學の講座の中に宗教學、宗教史的方面から神道を研

突する態度が自ら現れて居るといふことは、厚ち取りも直さず神道の宗教學的研究は可能であるといふことを學界から認められたといふ事を證明して餘りあると思ふのであります。是は即ち私の從來考へて居つた所と符節を合はす如き結果であるのであつて私は少くとも神道には宗教的方面があつて其方面の研究は宗教學者の擔當して研究すべきものであると確信して居りました結果、先づ東大の宗教學講義で神道の宗教學的研究を十年程前から始めたのであります。然るに今此講座の獨立は東京帝國大學に於て其事實を裏書して呉れたことになる。私は信するのであります。少くとも神道の一方面は宗教であると私は考へるのであります。然るに從來神道の研究家は此点を全く無視して神道のことを取扱つて居つた結果、其解釋が頗る不徹底な点があつたと思ふのであります。然るに是れから此方面の開拓が充分に出来れば神道の性質特色を明かにする上に於て光一明を興へることも出来る。私は考へるのであります。中には神道の哲學的研究を一足飛びにやられて、神道の哲學的建設を先づ試みようとする向もありますけれども、丁度哲學の建設に諸々の科學の研究結果が大切であると同じやうに、神道哲學の建設は神道の宗教學的研究を言換へれば神道の科學的研究の上に立つて而て其完成を見ることが出来るものである。私は思ふのであります。神道の哲學的研究にしても先づ神道の宗教學的研究を経て而して後に其大成を期すべきものであると考へるのであります。神道の宗教學的研究は神道の哲學的研究に這入る爲めの一大準備であると思ふのであります。以上諸種の方面からして學者の神道研究に對する態度を一言し

た所以であります。

明治神宮鎮座祭詠める歌並短歌

掛巻も綾に畏こき代々幡の下津磐根に宮柱太敷立天の下八十限ちす
みあらかに鎮めまつらすこの神の大勳功は久方の天にも満ち荒金の
地にも徹り天地の神もうつなひ外つ國にび照りかゝよひ日の木の國
の榮はば天地と常しへならむそこゆへに四方の御民よおのかし、齋
きまつるふ今日の日の生日の足日にあいらく畏こし

短歌

たてまつる豊みてくらの八開手を

うつやいつきの庭もさゝるに

門脇重雄